

異業種の連携と協働

—「野草時光隧道」活動の台中中区における教育実践を例として—

林珠雪

1. はじめに

筆者は、博雅書院院長兼通識中心主任の王崇名教授とともに、日本語学科において学際的な実践型授業「台日交流実践—農食育における言語実践」を 11 年間にわたり開講してきた¹。本授業は、台湾と日本の両地域で重要視されている「食・農」の課題を通じて、日本語学科の学生が実践的に学べるようにすることを目的としている。

2015 年以降、他学部の学生も参加するようになり、学際的な共学の機会が増えるとともに、日本語学科の学生の「言語の架け橋」としての役割も強化された。実践型授業であるため、本授業は台湾と日本の食・農関係者をつなぎ、大学の食農教育に関与させることで、彼らの相互交流と協力を促進し、東海大学に「台日食農大地連盟」という交流プラットフォームを設立した。

本稿は、筆者が 2021 年 9 月に東海大学の「人文創新と社会実践計画」(以下、人社計画)に参加したことを契機に、長年にわたり実施してきた実践的な授業を台中市中区(以下、中区)へと移し、教育活動を展開する機会を得た貴重な経験について記述したものである。本活動は、われわれのプラットフォームである「台日食農大地聯盟」のパートナーたちが、異業種連携の形で協働し、教育実践を行ったことで実現したものである。

従来の個別参加型の授業とは異なり、2021 年度の「台日食農大地連盟」のパートナーたちはチームとして連携し、中区を活動の場とし、「野草時光隧道」という製品発表イベントを企画した。本イベントでは、学生が協働作業を通じて、中区の歴史的背景や生活文化の特色を発信し、伝統的な薬草と東南アジアのハーブを融合させた保存食品を制作することを目的とした。そして、

2022年5月29日、中区の「ChangeX Beer 南園酒家」にて製品発表会を開催した。

コロナの時期、大学は全面的なオンライン授業を実施していたため、発表会は対面とオンラインのハイブリッド形式で行われた。参加者は、東海大学の教職員・学生に加え、中区の商業関係者、東南アジア系の新住民およびその関連業者・店舗関係者などで、総勢50名が対面で、15名がオンラインで参加した。また、本授業と8年以上の交流を続けてきた日本の「九州食と文化応援隊」の隊長中野幸浩氏とそのメンバーも全編にわたって参加し、コメントを発表した。

この活動が順調に進行し、参加者から高い評価をもらえたのは²、特定の個人や組織の功績ではなく、密接な協力関係とネットワークのつながりによるものだ。さらに重要なのは、価値観の共有と共感だといえる。これは、「ソーシャルキャピタル」に関する一部の定義とも呼応している。「ソーシャルキャピタルとは、人々が集まってできた一定範囲の社会に存在する相互信頼、規範、互酬性、ネットワークなどであり、人々の共通の利益や目的を達成することにも貢献する。したがって、その社会に属する人々にとってソーシャルキャピタルは共同の意識に植えつける相互関係そのものとしての価値を持っている」³(宮川壽夫, 2018)

「台日交流実践—農食育における言語実践」の授業を通じてつながった「台日食農大地連盟」は、相互の信頼とネットワークのつながりを基盤とし、異業種間の連携によって共通の目標を達成することを目的としている。

また、教育の場を通じて社会の「資本」と「ネットワーク」を結びつけることで、学生たちは、どのように互いのつながりや協力関係を活用し、共通の価値観のもとで目標を達成できるのかを直接学ぶことができる。



図1 対面およびオンラインでの参加来賓



図2 学生たちが自分の作った製品を紹介する様子

2. ソーシャルキャピタルとソーシャルネットワーク

「文献におけるソーシャルキャピタルの定義は、あまりにも多様であり、過度に柔軟である。一般的に、比較的共通認識のあるソーシャルキャピタルの概念は、『社会性、ソーシャルネットワーク、社会的支援、信頼、互惠、コミュニティ、市民参加』を指すものであり、ソーシャルキャピタルは主に活動・相互作用・感情の三つの要素によって構成される。活動とは、人々の行動そのものであり、すなわち社会参加を意味する。相互作用は特定の活動に依存せず、社会的なつながりやネットワークを通じて測定することができる。感情的要素とは、内面的な感情や関係に対する信頼を指す」⁴(傅仰止, 2005)。したがって、ソーシャルネットワークや人と人との結びつき、信頼関係は、ソーシャルキャピタルの蓄積において重要な要素であることがわかる。

ソーシャルキャピタルの概念は、その起源を George Homans (1961) の社会的交換理論まで遡ることができるが、一般的には 1980 年代から 1990 年代にかけて Pierre Bourdieu、James Coleman、Robert Putnam の三者がそれぞれ提唱した理論が議論の出発点とされている。特に、Putnam が 1993 年に出版した『Making Democracy Work (日本語訳: 哲学する民主主義)』以降、この概念は社会学のみならず、政治学、経済学、教育学など幅広い分野で議論・応用されるようになった。

Putnam は、ソーシャルキャピタルをネットワーク(network)、規範(norm)、信頼(trust)から成る社会制度であり、人々の協調性を促進し、社会的効率を高めるものと定義している。ネットワーク、規範、信頼は相互に連動しており、信頼はネットワークの中で生まれ、ネットワークの構築には互惠的な規範が不可欠である。そして、互惠的な規範は信頼の基盤の上に成り立つ。したがって、信頼はネットワークを強化し、ネットワーク内のポジティブな循環が互惠性を強め、互惠的な行動の蓄積がさらなる信頼を生む。このプロセスにより、ソーシャルキャピタルは螺旋状に拡大していく(田邊・影近, 2019)⁵。このように、人と人とのつながりや関係性こそがソーシャルキャピタルの本質であり、健全な社会の形成において重要な決定要因となるのである。

ソーシャルキャピタルの活用について日本では、地方再生や学校教育と地域活性化のつながりの構築といった課題において、ソーシャルキャピタルの活用が広く議論されている⁶。そして、ソーシャルキャピタルに関する議論は、多くの場合「つながり(連結)」の視点から展開され、「人と人」、「人と社会」の相互作用や拡大効果、さらには信頼関係の蓄積といった側面に焦点を当てて

いる。

この「つながり」の視点から「台日食農大地聯盟」の教育実践における運営モデルや成果を観察すると、共通の価値観を基盤とする「ネットワーク(network)、規範(norm)、信頼(trust)」が生み出す協調性が見て取れる。そして、互いのネットワークの拡大と結びつきを通じて、相乗効果が発揮されていることが明らかである。

3. 「台日食農大地聯盟」におけるネットワークと信頼関係の構築

「台日交流実践—農食育における言語実践」の授業は、教育部の「人文・社会科学知識の越境的応用能力育成」計画の一環として設立された⁷。本計画の主要な目的は、人文・社会科学系の学生に対し、社会実践能力を養う機会を提供することであり、「授業のグループ編成」「シミュレーションフィールド(模擬場域)」「革新的なアクション(創新行動)」の三つの視点から実施される。この取り組みでは、人文・社会科学の知識を核とし、学際的な授業やワークショップを通じて、大学内の実践フィールドの改修・活用を行い、異分野の共同学習、異分野間のコミュニケーション、チームワークを促進する「共創(co-creation)」の場を生み出すことを目指している。特に、東海大学は人文学と環境問題への関心が高い大学であるため、本計画は「生命への配慮」「環境への配慮」「社会への配慮」を重視する越境的な教育プログラムとしての役割も担っている。

当時、私はすでに日本語学科の修士課程にある「プロジェクト」⁸という授業の中で、約7年間にわたり「台日基層コミュニティ交流」⁹のプロジェクトを進めていた。このプロジェクトは、学生が社会とつながる実践の場を提供するだけでなく、関連分野の専門家との連携による学際的な学びの機会を含んでいた。こうした授業の特徴が、教育部の計画の目的と一致していたため、当時理学部長であった林良恭氏(後の教務長)の強い推薦のもと、本計画に参加することになった。

また、当時「台日基層コミュニティ交流」のプロジェクトの中で、すでに2年間にわたり「農・食」のテーマに取り組んでいたこともあり、2014年2月(103学年度後期)に、日本語学科で「台日交流実践—農食育における言語実践」という授業を開講することを決定した。この授業では、台湾と日本の双方で重要視されている「食と農」をテーマに、学生たちが「台日交流」「食農教育に関する知識と実践」¹⁰「翻訳実践」¹¹の3つの側面から学際的な言語実践を行う。これにより、学生は学際的な学びを深めるだけでなく、語学系の学生としての国際交流能力を実践的に養うことができる。

この授業は実践性と学際性を兼ね備えているため、実践の場が必要不可欠である。また、学生の越境的な学びの能力を育成するために、関連分野との学際的な連携も求められる。そのため、本授業には、実践指導を行う専門講師、台日の食農教育に関わる教師、そして関連分野の専門家も参加し、多分野にわたる協力体制のもとで運営されている。

2014 年の開講以来、本授業は「九州食と文化応援隊」の隊長である中野幸浩氏¹²と協力し、これまでに 11 年間の交流を積み重ねてきた。中野氏は、九州の食と文化応援隊長として、自治体のアドバイザーや 6 次産業化プロデューサーを務めながら、九州全域に築いた 1000 以上の農家、加工事業、地域作り団体などのネットワークを活かして、食の可能性の追究、食の大切さを訴え続けている。彼が率いる「九州食と文化応援隊」の参加メンバーも 100 名以上にのぼる。本授業は、日本とのつながりにとどまらず、長期的に土地に寄り添い、有機・無農薬米の栽培に取り組む苗栗三義の鯉魚コミュニティ、『中台湾食通信』の編集チーム、彰化北斗地域の「田野勤学」の陳光鏡氏、「舞春食農工作室」を創設し、現在「三玉号」の野草茶を経営する蘇立中氏、そして美術教育に携わった経験を持ち、食農美育の実践者として活動する張文鴻氏など、台湾の食農実務者とも連携している。さらに、環境保護に関心を持つ若手起業家たち（「黒皮泥思」の黄郁茹氏、鄭博元氏、謝媛菱氏）なども毎年本授業に参加し、自らの経験、農業への姿勢、起業の歩み、そして現在の食農環境について、経験談の共有や農作業体験の指導を通じて学生たちに伝えている。学生たちは、知識や経験を得るだけでなく、実践を通じて「生命が自らの手の中で育つ過程」を体験し、生命と土地、そして土地と自身との関係を深く感じ取ることができる。また、本授業は学際的かつ学部横断型の共同学習であるため、講義の学びに加えて、グループワークを通じた相互学習も貴重な成長の機会となっている。

中野氏を含む、日本と台湾双方の食農関連の実務者および参加者たちは、一定期間の協力を経て、本授業の東海大学の名の教師のつながりを通じて、「台日食農大地聯盟」というプラットフォームを立ち上げた。このプラットフォームは、日常的には LINE グループを活用して連絡を取り合い、定期・不定期の交流会を開催している。メンバーたちは本授業への共同参加を通じて、共通の価値観に根ざした交流を重ね、お互いに信頼関係を築いてきた。また、職業の性質や価値観の類似性から、互いの社会ネットワークを信頼のもとで共有し合っている。このような関係性により、「ソーシャルネットワーク内のポジティブな循環が互惠性を強化し、互惠的な行動の積み重ね

が信頼を高め、それが螺旋状にソーシャルキャピタルの拡大を促す」という構造が形成された。このソーシャルキャピタルおよびネットワークの広がりには、各メンバーの専門分野において、また、「台日交流実践－農食育における言語実践」の実践教育において、大きな効果を発揮している。さらに、本授業が東海大学の人社計画(人文・社会科学プロジェクト)の中部地域活動に参加する際、「台日食農大地聯盟」のメンバーたちは、それぞれの専門性を活かし、異業種間の連携・協力のもと、学生たちを実践的な活動へと導いていくようになった。

4. 「野草時光隧道」活動における台中中区での教育実践

4.1 活動の背景

2019 年以降、新型コロナウイルス(COVID-19)の影響により、授業内容の変更を余儀なくされる場面が増えた。特に、農作物の実際の栽培実習や、彰化や鯉魚村への訪問および活動が次々と中止された。これに代わる対応として、「九州食と文化応援隊」の隊長である中野幸浩氏の紹介を通じ、学生が日本九州の異なる地域で活躍する多様な食農専門家と交流できる機会が設けられた。さらに、日本の7名の専門家に対応する形で、台湾の7名の食農実務者を選出し、各グループの学生と交流を行った。

この交流形式は、本授業に新たな展開をもたらし、特にインターネットを介したコミュニケーションに慣れ親しんだ若い世代にとって、危機的状況の中での新たな対応モデルを提供するものとなった。また、日本の7名の交流者が九州の異なる地域に分布していることから、学生は同時に多地域の現状を知ることができ、より広域的な視点を持つことが可能となった。この7名の日本の交流者はいずれも「九州食と文化応援隊」のメンバーであり、長年にわたり中野氏が築いてきたネットワークを活用することで、学生たちは遠隔での対話やインタビューを実施することができた。しかしながら、一部の交流者がオンラインでの対話に不慣れであったことや、インターネット環境の不安定さにより、交流が円滑に進まない場面も見受けられた。特に、元々面識のない者同士が遠隔で深い対話を行うことには、一定の操作上の課題が伴うことが明らかとなった。

2021年9月、新型コロナウイルスの流行がやや落ち着きを見せたものの、国境を越えた実地交流や農作業実習の再開は依然として困難な状況であった。このような厳しい環境の中で、授業の方向性をどのように調整し、現実に対応させるかは大きな課題となった。こうした状況下において、

授業担当の教員が「東海人社計画」へ参加する機会を得たことを契機に、授業の実践場を拡張し、中区との連携を模索することとなった。

「東海人社計画」と地方創生の関連性を考慮し、本計画の初期段階では、過去に実施してきた言語実践授業および「台日食農大地聯盟」の枠組みを基盤とし、経済的価値の創出を伴う転換を試みた。具体的には、東海大学の人社計画活動をプラットフォームおよび媒介として、食・農・産業といった多面的な交流活動を展開し、一方で台湾の地域産業ネットワークとの結びつきを維持しつつ、他方で日本の「九州食と文化応援隊」との協力関係をさらに深化させることを目指した。この取り組みを通じて、台日双方の地域産業が相互に協力し、経済的利益を生み出すネットワークを構築することが期待された。

本計画は二つの段階に分けられる。÷

1. 第一段階:「台日食農大地聯盟」のメンバーを中区の実践場へ媒介し、前述のソーシャルキャピタルの拡大モデルに基づき、ネットワークの構築と共創を進める。
2. 第二段階:第一段階の基盤の上に、「九州食と文化応援隊」との人的交流やワークショップを実施し、さらには産業共創の可能性を探ることで、台日両地域の協力と共栄の関係を構築する。

4.2 「野草時光隧道」プロジェクトの展開

中区での調査を進める中で、薬草街の特色が「台日食農大地聯盟」のメンバーである蘇立中氏の「三玉号」野草茶¹³と協力・共創するのに適していることが判明した。蘇立中氏は長年にわたり野草の研究に従事し、伝統的な野草を現代的に解釈し、新たな価値を生み出すことに注力してきた。そのため、中区にある薬草街の意欲的な店舗と連携することで、薬草産業に新たな展開をもたらす可能性があると考えられた。しかしながら、店舗側の契約満了に伴う移転など、客観的な制約により、台湾の伝統的な薬草を活用した新商品の共創計画は実現に至らなかった。

しかし、この一連の交流と調査を通じて、中区の特色を再考する機会を得ることができた。薬草街は伝統的な薬草文化の中心地であるだけでなく、多様な生活文化が交錯し、新旧が共存する魅力的な地域である。この特性に着目し、蘇立中氏は「台日交流実践－農食育における言語実践」授業の一環として、「野草時光隧道」製品発表会を開催することを提案した。その基本理念は以下の通りである:

台中中区の光復路にある菓草街は、かつて台湾に移住してきた漢民族の生活必需品を象徴する場所であった。しかし、そのすぐ隣には、東南アジアの新住民文化が色濃く反映された「東協広場」が存在している。このわずかな距離の移動により、大きな歴史の変遷を感じることができる。この変化の感覚はまるで「時光隧道(タイムトンネル)」にいるかのようであり、初期移民の文化から現代の新住民の暮らしまで、台湾の移民史を象徴する物語が凝縮されている。この抽象的な歴史的感覚を具現化するため、食用植物を媒介とし、伝統的な菓草と東南アジアのハーブの移民史を表現することができる。また、「保存食」の概念を用いることで、異なる民族の食文化が時間をかけて融合し、新たな味覚が生まれるプロセスを表すこともできる。保存食は「時光隧道」の象徴であり、時間の経過によって独立した風味が統合され、より深みのある味わいへと変化するものである¹⁴。

以上のような現代台湾文化の多角的な融合を象徴するものとして保存食を開発することにより、中区の歴史と多文化的な奥深い魅力を表現する本プロジェクトは、中区で販売されている東南アジアのハーブと台湾伝統の菓草を活用した保存食品の商品開発を主軸とする。そして、「時光隧道(タイムトンネル)」というコンセプトのもと、地域の人物や資源を結びつけながら、商品化のプロセスを構築し、適切な販売チャネルへの展開および販促活動を実施することで、この地域の活性化に貢献することを目指している。

4.3 カリキュラム企画

2022年3月に開講された「台日交流実践－農食育における言語実践」授業は、上述の理念に基づき、期末に中区での製品発表イベントの開催を目標として計画された¹⁵。本プロジェクトの発案者である蘇立中氏が総責任者(総召)を務め、「台日食農大地聯盟」のメンバーと協力しながら、異業種連携のアプローチを用いて、学生を導きつつ公開形式のイベントを完成させることが本授業の中心的な取り組みとなった。

1. カリキュラム構成

本授業の前半では、知識の習得に重点を置き、中区の歴史や環境の理解、製品の製造およびプロモーション、フィールドワーク(田調)に関する基礎知識の構築などを行った。後半では、柔軟な授業形式を採用し、各グループがイベント準備に主軸を置いた活動を展開した。授業時間の

有無に関わらず、すべての学生は毎週リフレクションレポートを提出し、期末には製品発表イベントの実施に加えて、各グループの成果および振り返り報告会を行った。この報告会には、すべての指導者および中野幸浩氏が参加し、評価とフィードバックを提供した。また、各学生は自己評価表および相互評価表を提出することが求められた。

2. グループ編成と指導体制

本イベントは、製品の開発だけでなく、フィールドワーク、プロモーション、イベント企画など多岐にわたる要素が組み合わさる総合的なプロジェクトである。そのため、学生は自らの興味や学びたい分野に応じてグループを選択し、それぞれの活動に参加した。

「台日食農大地聯盟」のメンバーの中から、以下の 4 つの分野に適した専門家を指導者として選出した。しかし、保存食品の製造に関しては十分な専門知識を持つ指導者が不足していたため、蘇立中氏の専門的ネットワークを活用し、かつてエコキッチン「台中包心菜実験厨房」レストランを創設した「尋味獵人(フレイバーハンター)」の陳瓊惠氏(Lisa)氏を[製品開発グループ]の指導者として招請した。他のグループの指導者は以下の通りである。

- ・[製品開発グループ]:指導者:陳瓊惠(Lisa)氏
- ・[プロモーショングループ]:指導者:「中部食通信」編集者 簡均伶氏¹⁶、簡孝如氏¹⁷
- ・[フィールドワークグループ]:指導者:「黒皮泥思」創設者 黃郁茹氏¹⁸
- ・[イベント企画グループ]:指導者:大学時代からイベント企画の経験を豊富に持つ鄭博元氏¹⁹
謝媛菱氏²⁰

これらの 6 名の指導者は、それぞれの専門分野を活かし、3 月から順次、4 つのグループの学生を中区に導き、フィールドワークや現地調査、製品開発の具体的な実践を行った。

4.4 指導方針と協働の仕組み

本授業の指導者たちは、単なる専門的指導に留まらず、学生が「協働関係をどのように築くか」を学ぶことも重要な教育目標として設定した。そのため、問題が発生した際には、単なる解決策の提供ではなく、「どのように問題に向き合うべきか」「どのように解決策を見出すか」「どのように効果的なコミュニケーションを取るか」など、協調的な問題解決プロセスを重視した指導が行われた。指導者たちはこの共通方針のもとで協力し、学生が自主的かつ協力的に課題を乗り越えられるよ

う支援した。

学生のコミュニケーション能力の向上を重視し、本プロジェクトの運営においては、グループ間の円滑な連携を確保するために、各グループごとにLINEグループを設置し、日々の業務連絡や進捗管理を行った。また、すべての指導者および講義担当者が各グループのLINEに参加することで、学生の活動状況を適宜把握し、必要に応じてサポートできる体制を整えた。

さらに、指導者全員、講義担当者、各グループのリーダーが参加する大規模なLINEグループも設置し、全体の進捗や課題を総合的に管理した。このグループは、いわば有機的な指揮本部の役割を果たし、全体の状況を踏まえた上で、適切な協議を行い、必要な決定を迅速に下す仕組みを確立した。

このように、本授業は単なる理論学習にとどまらず、実際のプロジェクト運営を通じて、学生が異分野の専門家と協力しながら、実践的な問題解決能力やコミュニケーションスキルを養うことを目的としている。また、地域との連携を重視し、中区の活性化に貢献することを最終目標としている。

4.5 イベントの進行

1. 製品発表: コンブチャ+パン用ディップソース

中区が持つ台湾の伝統文化と東南アジアの生活文化が融合した特性を表現するため、また長時間の発酵を必要としない保存食品であることを考慮し、コンブチャを今回の製品発表の主役とすることに決定した。

学生たちが制作したコンブチャは、中区青草街の薬草をベースに、東協広場で見られる東南アジアの学生たちが制作したコンブチャは、中区青草街の薬草をベースに、東協広場で見られる東南アジアのーブを組み合わせることで、中区ならではの独自の風味を生み出している。また、発酵による多層的な味わいは、中区における台湾の伝統文化と東南アジアの生活文化が融合してきた歴史的プロセスを象徴するものとなっている。

製品開発グループの学生たちは、それぞれが感じ取った中区の特色を活かし、個性豊かなコンブチャを開発した。その後、すべての指導者およびクラスメートによる試飲を行い、最も人気のあった5種類のコンブチャを最終的な発表製品として選出した。さらに、当日のパンとの相性を考慮し、パン用のディップソースやサラダドレッシングも開発し、厳選した数種類を提供することとし

た。

なお、当日は厳格な感染防止対策を実施し、来場者および運営スタッフ全員が常時マスクを着用し、会場内での飲食を禁止とした。そのため、発表製品はテイクアウト用のランチボックス形式で提供し、来場者が自宅で楽しめるように配慮した。



図3 学生がコンブ
チャの製作プロセ
スを説明している



図4 来場者に持ち帰るテイクアウト用ランチボッ
クス(内容:スプレッド、サラダドレッシング、コンブ
チャ、さらにプロモーショングループの学生がデ
ザインしたラベルや製品説明カードなど)

2. 各グループの実施内容

[製品開発グループ]

Lisa 氏の指導のもと、学生たちは中区および東協広場周辺の伝統的な薬草茶専門店や、東南アジア風の特色ある店舗、さらに東南アジアの新鮮食材を扱う屋台を訪れ、調査を行った。そして、それぞれが思い描くコンブチャの風味を徐々に具体化し、最適な野草を選びながら、コンブチャのレシピを構築していった。

製品開発グループの学生全員が、それぞれの視点で「中区らしさ」を表現したオリジナルのコンブチャを製作し、その後、全体の試飲・審査を経て、最終的に5種類のコンブチ

ャを選出した。これらのコンブチャは、イベントに参加したすべての来場者に提供され、共有された。



図5 選ばれた5種類のコンブチャ(プロモーショングループの学生がデザインしたラベル付き)



図6 会場でスプレッドとディップソースを調理(選ばれたレシピに基づいて製作)

[プロモーショングループ]

本グループは、すべてのプロモーション活動を担当した。学生たちはInstagramの公式ページを開設し、日本語と中国語の二言語でイベントの最新情報を随時更新し、イベントのコンセプトや製品の詳細を紹介した。また、製品のロゴデザインや招待状、立て看板などの各種グラフィックデザインも手がけ、イベントの視覚的なブランディングを担った。



図7 IG 宣伝ページの開設



図8 各種立て看板やグラフィックデザインの制作



図9 イベント前日の会場デザイン

[フィールドワークグループ]

本グループは、中区の歴史や文化について何度も調査を行い、イベント当日にはガイドツアーの形式で来場者を案内し、中区の魅力を直接体験できるように企画した。また、オンライン参加者にも対応するため、中区のガイドツアー動画²¹を事前に撮影し、日本語と中国語の二言語で編集・制作し、イベント当日に配信した。



図 10 薬草街の店舗調査



図 11 イベント当日のガイドツアー

[イベント運営グループ]

グループは、イベント当日の全体進行の管理および会場運営を担当した。業務内容には、会場の手配や各種設備のレンタル、関係者との調整、来場者の受付・案内などが含まれる。スムーズなイベント運営を実現するため、メンバーは何度も会場の下見を行い、各グループと随時連携を取りながら、当日のスケジュールを調整した。また、突発的な変更やトラブルに対応するため、臨機応変な判断と対応力が求められる²²。



図 12 イベント運営グループの業務手配



図 13 イベント運営グループとフィールドワークグループと一緒に現地視察を行う

各グループ間のスムーズな連携や、各プロセスが適切に結びつくためには、高いレベルの協調性とチームワークが求められた。これは、メンバーの協働精神が試される場面でもあった。しかし、指導者間の共通認識と、相互のネットワークが円滑に機能したことにより、5月29日のイベントでは、全体としての協力・共創の成果が見事に表現されることとなった。

〔危機と転機〕

Omicron 株の感染拡大が深刻化する中、東海大学は5月14日に全面オンライン授業への移行を発表した。この決定は、3月から準備を進めていた製品発表イベントにとって、大きな衝撃となった。特に、4月以降、すでに本格的な準備に取り組み、熱心に活動していた学生たちにとっては、大きな挫折感をもたらす出来事であった。さらに、このイベントをオンライン開催に変更する場合、イベントの本来の意義が大きく損なわれてしまうという懸念もあった。この状況を受け、メンバー全員で慎重に話し合いを行い、最終的には学生の意向を尊重するために投票を実施し、その結果を踏まえて当初のスケジュールを再調整することとなった。そして、厳格な感染防止対策を講じた上で、対面とオンラインを併用するハイブリッド形式で製品発表イベントを実施することが決定された。

この一連のプロセスを通じて、学生たちは共に創り上げた成果の価値をより深く実感し、また、変動の多い世界の中でどのように柔軟に対応すべきかを体験する機会となった。加えて、どのような状況においても前向きな姿勢と適応力を持ち続けることの重要性を学ぶことができた。

5. 終わりに

もともとは、授業担当者の個人的な依頼をきっかけに台湾と日本の食農実務者が本授業に関わるようになった。しかし、長期にわたる協力関係を経て相互の信頼が築かれたことで、「台日食農大地聯盟」という交流プラットフォームが誕生した。このプラットフォームは、信頼関係を基盤とすることで、安心して資源を共有し、横のつながりを強化し、互恵的な関係を築くことを可能にしている。

これまで「台日食農大地聯盟」のメンバー同士の交流は感情的なつながりを基盤としており、互的なネットワークや媒介的なつながりはあったものの、比較的個別の協力関係にとどまっていた。

しかし、今回の「野草時光隧道」の製品発表イベントを通じた共同作業の経験により、共通の価値観を持つ相互信頼のあるグループは、有機的な協力体として健全かつ調和のとれた形で機能することができる実感することができた。

今回の「野草時光隧道」活動では、学生たちが中区をより深く理解する機会を得ただけでなく、協働の意味と重要性を実体験を通じて学ぶことができた。学生たちが毎週提出するリフレクションレポートを通じて、彼らがこれまで持っていた中区に対する固定観念(あるいは偏見)が揺らぎ、中区への関心(さらには貢献意識)を持続けようとしていることが明らかとなった。また、何かを成功させるためには、多くの人々の力が必要であり、そのためにはリーダーシップのみならず、円滑なコミュニケーションと協調が不可欠であることも学ぶ機会となった。

「九州食と文化応援隊」の中野幸浩氏は、オンラインで本イベントに全編参加し、「野草時光隧道」のコンセプトが地方創生の要素に非常に適していると評価した。そして、今後は九州と中区の交流を進め、台湾と日本の地域間で共通のマーケティング戦略を用いることで、互いの地域における認知度を向上させたいとの展望を示した。

このような展望のもとで、社会ネットワーク内のポジティブな循環によって互惠性が強化され、その互惠的な活動の積み重ねが信頼関係を深めていく。さらに、その強固な信頼がポジティブな循環と連携を生み出し、螺旋状に社会資本が拡大していくことが期待される。

(本稿は、2022 年に開催された「新実践および台日大学による地域連携と社会実践に関する国際シンポジウム」で発表した内容に加筆、修正を加えたものである。)

(林 珠雪 リン シュセツ 東海大学日本言語文化学系)

参考文献

1. 傅仰止(2005)「社會資本的概念化與運作」,『台灣社會學第九期』: pp.165-203。
2. 小藪明生・濱野強・藤澤由和(2007)「ソーシャルキャピタル研究における一般的信頼の位置づけ」,『新潟医福誌』7(1), pp.60-63。

3. 宮川壽夫(2018)「ソーシャルキャピタルによる企業価値創造のプロセス-ファイナンス理論の視点に基づくソーシャルキャピタル研究レビュー-」, 『経営研究』第 69 巻, 第3・4号, pp.1-15。
4. 大束貢生(2018)「学校を中心とした地域活性化の可能性について-コミュニティ・スクールとソーシャル・キャピタルの関係から」, 『佛大社会学』第 43 号, pp.34-44。
5. 田邊望・影近謙治(2019)「ソーシャルキャピタルの観点からみた今後のリハビリテーションの取り組み方, そして農・食分野との連携のもつ可能性について」, Jpn J Rehabil Med 2019 : 56 : 892-898。

附録【課程計画表】

110 台日交流実践 - 農食育における言語実践

実践フィールド: 台中中区

テーマ: 「野草の時光隧道(タイムトンネル)」(具体的な成果として植物を用いた保存食の開発を主軸とし、「時光隧道」を象徴とする。地域の人材や資源を結びつけ、異業種連携のモデルを通じて共創・共栄を目指す。)

総責任者(総召): 蘇立中

・各分野担当指導者:

- ・ストーリーテリング／プロモーション担当: 簡均伶・簡孝如
- ・製品開発(発酵・保存食): 陳瓊惠(Lisa / 尋味獵人)
- ・イベント運営: 鄭博元・謝媛菱
- ・フィールドワーク(ストーリー収集含む): 黃郁茹
- ・アドバイザー: 元五青草

【カリキュラムスケジュール表】

日付	内容
2月21日	全体カリキュラムの紹介

3月7日	陳炯志・余炳倫による中区の紹介(学生が中区へ訪問)
3月14日	蘇立中(全体理念と構想) / Lisa(尋味獵人)による発酵と保存食の講義
3月21日	元五青草店訪問 / イベント会場の下見(学生が中区へ訪問)
3月28日	簡均伶・簡孝如によるプロモーションの講義
4月11日	中間進捗確認 - Lisa+各指導者
4月18日	期中試験(休講)
4月25日	各グループによる進捗報告
5月	5月末のイベント開催を予定(5月中のスケジュールは柔軟に調整)
6月6日	期末発表(成果と振り返り)

注

¹ 日本語学科は2014年に、食と農をテーマとした台湾と日本の交流実践授業「台日交流実践―農食育における言語実践」を開設した。2015年には、食と農の課題をより広い視点から捉えるため、社会学分野の王崇名教授と共に同時授業の形で領域を超えた教育協力を行った。履修学生は日本語学科の学生に限らず、全学部・学科から集まり、授業の中で学部・学科を超えた共学と相互支援を行っている。

² 今回の活動は非常に大きな反響を呼び、参加者である中野氏や愛知県立大学の東弘子教授も、活動の内容や感想をそれぞれのFacebookグループで発信した。東教授は、学生たちの優れたチームワークを高く評価するとともに、愛知県立大学でも同様のコンセプトの授業が行われていることを紹介し、今後さらなる協力の可能性について期待を寄せた。また、中区で「小夏天」というベトナム料理店を運営するJosie氏や、ジャム達人の柯亞氏も、「学生たちが作ったコンブチャの品質には驚かされた。すぐに商品化できるレベルで、味や香りも非常に魅力的だ」と絶賛した。

³ 宮川壽夫「ソーシャルキャピタルによる企業価値創造のプロセス」p.2

⁴ 傅仰止「社会資本的概念化と運用」pp.169-171。

⁵ 田邊望・影近謙治「ソーシャルキャピタルの観点からみた今後のリハビリテーションの取り組み方、そして農・食分野との連携のもつ可能性について」p.893。

⁶ 注5で示した論文では、社会資本をどのように地域と食農のつながりに活用し、リハビリを必要とする地域住民を支援するかについて論じられている。また、柏木恵子(2016)、熊谷慎之輔(2017)、大東貢生(2018)などの研究では、ソーシャルキャピタルの観点から地域と学校の協働関係や結びつきが探究されている。

⁷ 成功大学が主導する本プロジェクトは、その目標と方向性を定め、東海大学と中山大学が先行して試験運用を行い、計画の実施モデルを構築した。2014年(103学年度)に試験的に実施された後、2015年(104学年度)以降、より多くの学校が参画できるような典型的なモデルが提供された。本プロジェクトでは、参加教員が既存の授業を活用しながら、学校の実践的な場と結びつけ、学生が実際に現場で学ぶ機会を増やすことを目指している。

⁸ 本学科の修士課程では、一般的な理論科目に加えて、学生の社会とのつながりを重視した実践的な能力の育成にも力を入れている。そのため、2年次の実践科目「プロジェクト」を必修科目として設定している。「プロジェクト」の授業は、学生が社会とつながり、実践的な能力を養うことを目的としており、具体的なプロジェクトの企画・運営・コミュニケーション能力の向上を重視している。そのため、教室内で完結する授業ではなく、

実際のフィールドでの実践活動を行う形式となっている。これまでに、「山プロジェクト」、「メディア越境プロジェクト」、「台日基層コミュニティ交流」、「東アジアの歴史と人の移動」、「日本語プロジェクト」の5つのプロジェクトが実施されてきた。

⁹ 2007年から実施されている「台日基層コミュニティ交流」のプロジェクトは、言語の架け橋としての機能を活かし、共通の課題を持つ台湾と日本の基層コミュニティをつなぐことを目的としている。これまでに取り組んできた課題には、「コミュニティ再生」や「青少年教育」といったテーマがあり、2012年から約2年間では「農食育」の問題に焦点を当てている。学生たちは、各種座談会、視察、スタディツアーの企画・参加を通じて、学際的な学びを深めると同時に、日本語でのコミュニケーション能力を実践的に磨くことができた。

¹⁰ 専業の農業指導者の指導の下、東海農場で実際に栽培を行う。

¹¹ 翻訳の架け橋として、どのように伝え、どのように実践するかを学ぶ。

¹² 中野氏は九州朝日放送(KBCラジオ)で自身の番組「NAKANO KITCHEN」を担当している。中野氏の経歴や「九州食と文化応援隊」についての詳細は、以下のリンクを参照のこと。: <https://kbc.co.jp/r-radio/nakano/>

¹³ 主に台湾のさまざまな野草や野生植物を活用し、興味深い製品を開発することで、消費者がこれらの植物を知る機会を提供し、さらには環境と私たちの関係について深く理解できるよう促すことを目的としている。蘇立中氏の野草茶に関するコンセプトについては、以下のリンクを参照のこと。

https://greenmedia.today/article_detail.php?cid=10&mid=3

¹⁴ これらの理念と構想は蘇立中氏によるものである。

¹⁵ 付録【課程計画表】に参照

¹⁶ 複数の肩書きを持つスラッシュキャリアの起業家であり、講師、クリエイター、キャリアコンサルタントとして活動している(PMP 国際プロジェクト管理資格保持者、CDA 国際キャリア開発アドバイザー)。自身のウェブサイトとPodcast「波莉的斜槓路(Pollyのスラッシュキャリアの道)」を運営している。8年間の市場開発およびプロジェクト管理の経験を持ち、テクノロジー業界を離れた後、非営利組織(NPO)に参加し、台湾の地方コミュニティ開発に携わる。これまでに台湾教育部(文部科学省に相当)、農業委員会、台中市政府などの政府プロジェクトの企画・実施に関わった実績を持つ。

¹⁷ 国立台湾芸術大学図文伝播芸術学科を卒業し、現在はフリーランスのグラフィックデザイナーとして活動。また、『中部食通信』の編集長兼アートディレクターを務めている。

¹⁸ 台中市烏日区の地域知識データベースの構築を進めており、食農教育・環境教育・郷土教育の三つの側面を含む。また、地方創生の実践に向けて、各地の若手実務者との交流イベントを定期的に企画・実施している。

¹⁹ 営業担当、プロジェクトマネージャー、企画部門の責任者などを経て、現在は「缺點咖啡」の監査役および「學習土壤有限公司」の代表を務めている。

²⁰ これまでに逢甲大学キャリア発展センターのプロジェクトマネージャー、弘道老人福祉基金会の事務局企画担当、知識夥伴会社のプロジェクトマネージャーなどの職を歴任し、現在はフリーランスとして活動している。

²¹ フィールドワークグループがオンライン参加者向けに事前収録したガイドツアー動画。日本語と中国語の同時表示 <https://youtu.be/yT1nFQtpExw>

²² 学校が全面オンライン授業を発表した際、イベント運営グループは直ちに必要なスケジュール調整と関係者との連絡対応を行う必要があった。